

できごと

平成 28 年 6 月 21 日(火)に、当館講堂で「子ども図書研究室講演会」を開催しました。ドキュメンタリー映画「子どもに本を-石井桃子の挑戦1 ノンちゃん牧場」の監督・森英男氏を講師にお迎えし、作品の上映と解説などをしていただきました。

(2 ページ目にて、概要を紹介します。)

平成 28 年 7 月 8 日(金)に、県立中央図書館で平成 28・29 年度に渡って開催される、静岡県子ども読書アドバイザー養成講座の第 1 回目がありました。この講座は、地域で子どもと本をつなぐ活動をしている方の中から、リーダーとして、学校や図書館をつなぐコーディネーターとして、活躍される方を養成するための講座です。

アドバイザーは、2 年間で計 6 回の講座を受講します。

今回は、子ども読書アドバイザーの概要やアドバイザーの役割についての説明の後、児童文学作家・翻訳家の清水眞砂子氏による基調講演もありました。

(3 ページ目にて、概要を紹介します。)

◇子ども図書研究室のテーマ展示◇

◆実りの本 8/1~9/29

◆ピアトリクス・ポター生誕 150 年、
山本忠敬 生誕 100 年 9/1~10月中旬

◆一番新しいクリスマスとお正月の本 10/1~11/29

◆瀬田貞二 生誕 100 年 10月中旬~11月中旬

◇イベント情報その1◇

◆国際子ども図書館 講演会 いま、イタリアの子どもの本は?~国際子ども図書館展示会「こんにちは! イタリアー子どもの本のファンタジスタたち」関連講演会

日時: 11 月 5 日(土) 14 時~16 時
(13 時 30 分受付開始)

講師: 吉富文氏(翻訳家)

司会: 野上暁氏(日本ペンクラブ「子どもの本」委員会委員長)

会場: 国際子ども図書館 アーチ棟 1 階 研修室 1
対象: 中学生以上(定員 100 名)

申込: 往復はがきまたはインターネット(URL は、以下のとおりです。)

http://www.city.taito.lg.jp/index/bunka_kanko/torikumi/uenonoyama/koenkai.html

締切: 10 月 19 日(水) 必着

参加: 無料

◇イベント情報その2◇

◆平成 28 年度 第 24 回 静岡県図書館大会

会場: 静岡県コンベンションアーツセンター
グランシップ

日時: 平成 28 年 11 月 7 日(月)
9:45~15:45

申込: 申込用紙(県立中央図書館ホームページからプリントアウト・県内公共図書館で配布)に記入の上、来館、郵送または FAX

宛先: 静岡県立中央図書館 企画振興課振興係
〒422-8002 静岡市駿河区谷田 53-1

FAX: 054-264-4268

締切: 平成 28 年 10 月 6 日(木)

※第 3 分科会は 10 月 20 日(木)まで

◆子どもの本に関する分科会

13:45~15:45

◇第 2 分科会 幼児・児童に対するサービス
(定員 180 人)

テーマ: 「子どもと楽しむ科学絵本
~科学絵本をもっと身近に~」

講師: 塚原博氏(実践女子大学教授)

◇第 3 分科会 子どもの読書活動
(定員 500 人)

テーマ: 「読む力が未来をひらく
~子どもに本を手渡すために大人
ができること~」

講師: 脇明子氏(ノートルダム清心女子
大学名誉教授、岡山子どもの本の会
代表)

平成 28 年度 子ども図書研究室講演会

今年の講演会はドキュメンタリー映画「子どもに本を-石井桃子の挑戦1 ノンちゃん牧場」の監督・森英男氏を講師にお迎えし、作品の上映と解説などをしていただきました。

石井桃子は『くまのプーさん』や『ピーターラビットのおはなし』の翻訳などで知られ、日本のこどもの本に、多大な影響を与えた人物です。今回の映画では、石井桃子が戦後、友人らと宮城県栗原市鶯沢ではじめた「ノンちゃん牧場」について紹介されました。

森監督が本作を製作するきっかけとなったのは、2007年に石井桃子が100歳をむかえたというニュースを目にしたことでした。本が大好きな少年だった監督、自らが親しんできた作品の多くを手がけた石井桃子の名を再び目にし、調べるうち、そのあゆみを映像に残したいと本作を製作することになります。

昭和19年、労働科学研究所所長の秘書として川崎の軍需工場を訪れた石井桃子は、女学校の教師・狩野ときわと出会います。二人はすぐに意気投合、石井の夢である農場経営を知った狩野はこれに応え、狩野の故郷である鶯沢で農場を始めることになります。この時、石井桃子は38歳。すでに後年に読み継がれるような児童文学作品の翻訳などを手掛けていましたが戦争が続く中、英語は敵国語、子どもの本は不要とされ、行き場を失っている頃でした。

開墾の日は奇しくも昭和20年8月15日。狩野の教え子、石井の甥なども参加し開拓にあたりますが、容易にはいかず過酷な労働の毎日でした。また、戦後の激しいインフレなどにより借金が増え、厳しい生活を強いられていたそうです。

この頃、石井は皆が寝静まった後、戦中に書きすすめていた『ノンちゃん雲に乗る』を清書していました。本書はベストセラーとなり、石井たちは乳牛を飼えるようになります。開墾から3年目のことでした。しかし、当時の農家には現金収入がなく、牛乳は飛ぶように売れましたが、運営資金がありません。そこで石井は東京で稼ぐことになりました。

東京に出た石井は、岩波書店で長く読み継がれる作品を多く手がけますが「この本を子どもは本当に面白がるのだろうか？」と思いつつも確かめる術がない、という問題に直面していました。そのような中、一年間の欧米視察という機会を得て、北米の図書館や児童文学に関わる人達と出会います。そこである図書館員の「良い仕事をするには実際の子どもと常に向き合わなければならない。子どもに読んでやったり、子どもの読むところをみなければならない」という言葉が強く印象に残ったといいます。

帰国後、石井は農場のある鶯沢の小学校で2年間、読み聞かせを始めます。この経験は石井にとって大きな糧となりました。

物静かで穏やかな印象の石井さんだが、思い込んだらどんどん突き進む情熱的な人でもあった、という監督の解説どおり、激動の時代の中、諦めずに自分の道を進む石井桃子の姿を、垣間みることができる作品でした。興味を持たれた方はDVDを是非ご覧ください。

所蔵資料から

文学

『ひみつの王国 評伝石井桃子』

尾崎 真理子 / 著

新潮社

2014年6月



読売新聞文化部記者である著者が、本人へのインタビューや書簡などをもとに石井桃子101年の人生を追った評伝。(安田)

平成 28・29 年度静岡県 子ども読書アドバイザー養成講座

静 岡県教育委員会では、各市町で活動するボランティアの中から、地域の子どもの読書活動推進リーダーとしての役割を担う人材を「静岡県子ども読書アドバイザー」として認定しています。現在は県内 31 市町の計 205 人がアドバイザーとして認定されています。2 年間に渡る養成講座の第 1 回目となる今回は 47 人が受講しました。



子 ども読書アドバイザーの役割については、静岡県読み聞かせネットワーク副会長の勝山高氏がお話しされました。



ア ドバイザーが活動していく上で大切なのは、活動理念をきちんと持つことです。今一度確認していただきたいのは、私たちの目的は「本を読む」ことではなく、子どもたちが健全に豊かに育つことです。子どもたちが健全に豊かに育つために本や読書が有効であるから、良い本を手渡していきたい。だから、アドバイザーの役割が生きてくるのです。

目的が決まると、それを達成するための行為、例えば「本を知る」「読み聞かせの方法を身につける」などの目標が明確化します。すると、目標を達成するための方法、「読書会をする」「おはなし会のための勉強会、反省会をする」等の手段がわかってきます。また、長く読み継がれてきた本を知ることが大切で、優れた作品を多く読むことは選書に大いに役立ちます。

学び続けることが大切という勝山さんのお話は、これからアドバイザーとして活動される皆さんへのエールにも感じられました。



清 水眞砂子氏は基調講演で「子どもの本には夢がある???'というテーマでお話されました。子どもを取り巻く社会に疑問を投げかけながら、厳しくも温かいお話をされました。

子 どもに本を手渡すときには、考え方の「ものさし」を限定して渡していないかということに気を付けなければいけません。障がいがあったり貧しかったりしても頑張る姿は素晴らしいと思いますが、そればかりを持ち上げる風潮に違和感を覚えます。児童文学は逆境を乗り越える話が多く、大人はそれを子どもたちに読ませたがりです。しかし、その裏で追い詰められている人もいないのでしょうか。

それと同じように、みんな仲良く、一緒に何かするのだけが良いことではないと思います。一人であることの豊かさや、話しかけないことの良さもあります。それは例えば『もりのなか』や『わたしとあそんで』（どちらもマリー・ホール・エッツ作）から知ることができます。子どもには様々なものさしを渡して、いろいろな見方を持ってもらいたいと思います。

また、絵が気持ち悪い、かわいくない等で読む本を排除してしまうのはもったいないことです。「絵を読む」ということでもしてみてください。



「も のさし」について振り返るきっかけになり、子どもに本を手渡すということを改めて考えさせられるお話でした。



子 ども読書アドバイザーの今後に期待するとともに、その活動に当館の子ども図書研究室を役立てていただけるよう、広報やサービスをより充実させる必要性も感じました。

所蔵資料から

文学



『きみは知らないほうがいい』

岩瀬 成子／作

長谷川 集平／絵

文研出版

2014 年 10 月

いじめの力学を書いた本として、清水氏から紹介されました。岩瀬成子氏の著作は現代の子ども社会や関係性が的確に書かれており、注目されているそうです。(眞子)

知識



『道具からみる昔の暮らしと
子どもたち 1～3』
須藤 功／編
農山漁村文化協会
2016年3月

昭和20年代から40年代頃、井戸で水を汲む、かまどで煮炊きをする、牛を使って田を耕すといった、今とは少し違う暮らしがあった。

昔の暮らしに使われた道具を中心にした子どもたちの写真と、わかりやすい文章から、当時の生活風景を知ることができる。全3巻のうち、1巻は家の仕事、2巻はあそび、3巻はのら仕事についてまとめられ、各巻末に掲載写真の撮影日と場所、本文より少し詳しい解説が添えられている。編者は宮本常一氏に師事した民俗学写真家。【小学校中学年から】(仲本)

知識



『自転車ものがたり』
高頭 祥八／文・絵
福音館書店
2016年4月

今や世界中で利用されている身近な乗り物、自転車。約1,400個もの部品で作られているそうだが、その原型が登場したのは19世紀初め、ドイツの発明家が「はやく歩く器械」として考案したのがはじまり。本書では、乗りやすさや走りやすさ、安全性を追求しながら新しい発明を次々と取り入れ、今の形となるまでの歴史などをイラストと文章で紹介している。

1998年に同社の月刊誌「たくさんのふしぎ」に掲載されたものの書籍化。【小学校中学年から】(安田)

文学



『テオの「ありがとう」ノート』
クロディーヌ・ル・グイック
=プリエト／著
坂田 雪子／訳
PHP 研究所
2016年3月

生まれつき障がいがあり、車いすに乗って障がい者支援施設で暮らす12歳の少年テオは、自分が健康な人よりはるかに多く「ありがとう」や「すみません」を言わなければいけないことにうんざりしていた。「ありがとう」を減らすためには自分でできることを増やさなければならない。それは自分自身と向き合い、自立をしていくことでもあった。家族や施設の職員との関係、友情、障がい者スポーツに取り組む大人との交流をとおして少年が成長する姿をさわやかに描く。【小学校高学年から】(眞子)

絵本



『うまれたよ! オトシブミ』
安田 守／写真・文
岩崎書店
2016年3月

昆虫のオトシブミがゆりかご(揺籃)を作り、その中で卵が孵化し、成虫になるまでの過程が短い文章と大きい写真でつづられている。身近な生き物ではないが、低年齢でも理解できるように努めている。写真もきれいでわかりやすい。巻末には、一日ごとの成長の様子がまとめられている。

誕生と成長をポイントにしているので、オトシブミ全般の知識を得るにはさらなる資料が必要である。「よみきかせいきものしゃしんえほん」全30巻のうちの1冊。【小学校低学年から】(青山)